

「おれんじおおさか」での年末旅行

池田良穂

2021年の年末、恒例の家族での温泉旅行で道後温泉と奥道後温泉にでかけました。往路は、大阪南港から愛媛県の東予まで四国開発フェリーの「おれんじおおさか」に乗船。瀬戸内海を夜間航海できる最大の瀬戸内マックス型のカーフェリーで、これが3回目の乗船です。家族連れで6人と大人数だったので、節約のためにシングルの個室を6室使った船旅にしました。22時の出港ですが、20時から乗船できるので、夕食は船のレストランで愛媛名物の料理を堪能。もちろんお勧めの「鯛めし」もしっかり食べました。注文してから料理をしてくれるので、あつあつの料理が食べられます。焼酎や日本酒もいろいろ揃っていました。

翌朝6時には東予港に到着しますが、7時まで船内で過ごすことができるのは嬉しいサービスです。ゆっくり朝食も食べてから下船。

道後温泉に入る前に、今治まで移動して来島海峡を行き交う船をウォッチングし、しまなみ海道を生口島までドライブして、家族が瀬戸田の美術館などを見ている間に、内海造船の対岸から艀装中の宇和島運輸の「れいめい丸」と、日生汽船のRORO貨物船「日侑丸」の姿を撮影することができました。

泊った宿は道後温泉の中心街にあり、道後温泉本館まで徒歩1分の場所でした。道後温泉本館は修理工事が始まって3年になり、まだ3年間かかるとのことですが、お風呂だけは入ることができます。ただし、1回に10人までで、整理券をもらって、指定された時間に行く必要があります。朝、7時に本館の受付に行くと14時半からの整理券がもらえました。ただ休憩場所もなく、まさに温泉に浸かるだけしかできませんでした。

2泊目の宿は奥道後温泉にしました。来島どっく、佐世保重工、日本高速フェリー、関西汽船等の再建を手掛けた坪内寿夫氏が開発した温泉地と聞いていたので、一度は見てみたいと思っていましたが、実際に訪れたのは今回が初めてです。石手川の川沿いの崖に沿って300m以上もある長い建物でできているホテルは、大型客船をイメージして建てたとも聞いており、4階にあるフロントから3階に降りるとその1層が長大なロビーになっており、どこからでも石手川と裏山が一望できます。一番奥には坪内氏の記念コーナーがあり、同氏の経営者としての生涯が見られるようになっていました。あまり同氏についての詳しいことを知らなかったので売店に置いてあった、同氏に関する本を2冊ほど購入して読んでみました。これまで伝聞していたのはかなり違った経歴と最後で、いまでも経営者としての評価が高いことを知りました。ホテルから裏山の山頂までロープウェイがありますが、今は運航されていませんでした。



おれんじおおさかの 3 層吹き抜けのロビー



ロビーの 2 階にあるテレビ視聴スペース。



ロビーの最上層



レストランは一部の料理はカウンターに並んでいますが、ほとんどが注文してから調理され、できると番号をアナウンスしてくれました。



レストランの入口には生ビールの自動サーバーと、焼酎や日本酒の瓶が並んでいました。



東予港でフェリーを降りて今治を經由して生口島に向かいました。しまなみ海道の来島海峡大橋手前のサービスステーションからは、来島海峡を今治に向かうカーフェリー「第 2 せきぜん」の姿が見えました。ユニークなトリマラン型カーフェリーです。



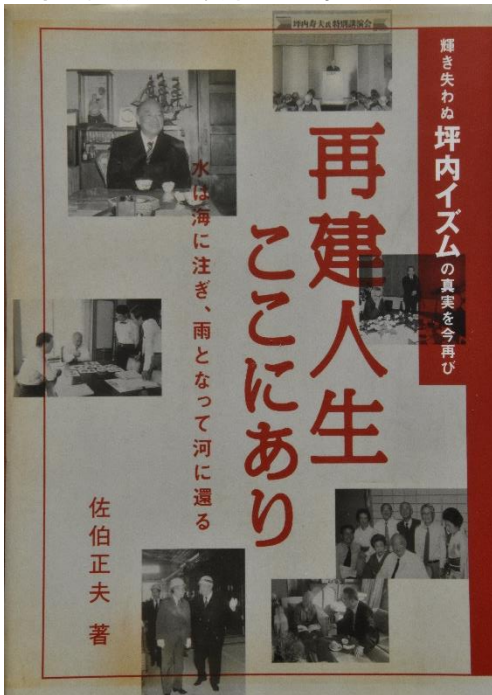
生口島にある内海造船の瀬戸田工場で艤装中の宇和島運輸の「れいめい丸」の姿が見れました。6 月には八幡浜と別府の航路に登場します。



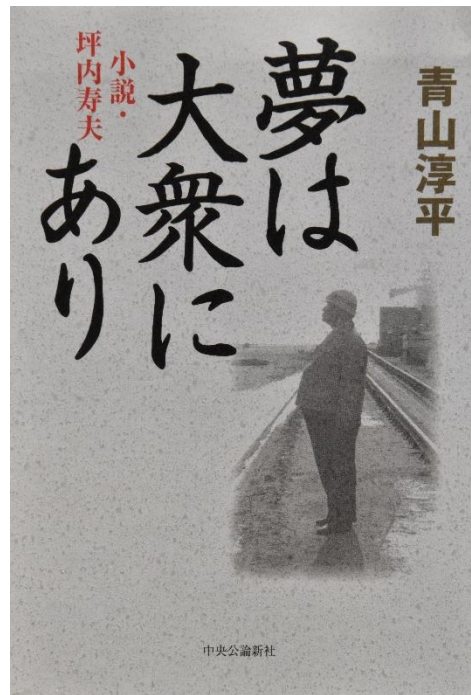
同じく内海造船の岸壁には RORO 貨物船「日侖丸」の姿がありました。



内海造船瀬戸田工場周辺の全景です。



奥道後温泉のホテルの3階の300mものプロムナード・ロビーにある坪内記念コーナーで購入した佐伯著「再建人生ここにあり」(愛媛ジャーナル発行)の表紙です。坪内氏の元で働いた佐伯氏の見た坪内氏の経営者の姿を克明に記録されていて読み応えがありました。



青山著「夢は大衆にあり」は、坪内氏の一生をモデルにした小説で、こちらも奥道後温泉で購入しました。中央公論新社発行。